

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年10月21日

氏名 (フリガナ)	樽本 むいな
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2017年10月8日(日)～10月14日(土)
所属機関名 身分	札幌マタニティウィメンズホスピタル 助産師

私は16年前に看護師となり、癌の子どもたちが多く入院する小児病棟で3年働いていましたが、助産師として働くという憧れを持ち続けていたため、思い切って助産師になる決意をしました。その後無事に助産師となり、産婦人科病棟で勤務をしたり、出産・育児や引っ越し等のため主婦をしたり、子どもの療育施設で保健師をしていた時もあります。現在は主人と協力しあい5歳と2歳の男の子を育てながら産科クリニックで助産師として働いています。

小児病棟へ勤務していた時は、子どもたちの病気や死と向き合い、看護師として考えたり悩む事も多くありました。かわいい子どもたちが大変な治療をしていても段々具合が悪くなって亡くなってしまふ事や、看護師になりたての自分が先輩たちと違って上手に子どもたちや子どものご家族へ関われない事、点滴管理や呼吸器管理など難しい看護内容に対する自分の知識・経験不足など、日々悩みが多く、思わず泣いてしまう事がよくありました。

今回のポートランド看護研修では、安楽死に関する講義において、人間の生と死に関してよく考える機会を与えていただきました。「安楽死を選択し、そのための薬を処方してもらっても、薬が手元にあるという事が安心感となり、実際には安楽死を選択しない患者さんもいる」という点や、「安楽死を選択していても、それを実施するまでの1週間、自分にとってとても大切で思い入れのある家族や友人の写真を毎晩じっくり眺める中で、最終的には安楽死を選択しない人々もいる」という点がとても印象的でした。「死」というのは、人々の人生から「死」それだけを切り離して考えるものではなく、生まれてから今までの人生である「生」とずっとつながっているものなのだ強く感じました。

また、状態が悪くなっていってしまう子どもの治療方針に関して、子どもの両親間でそれぞれの方向性が異なってしまう、父親と母親がぎくしゃくしてしまった時に、上手に看護師として対応できなかった事を相談する事ができました。講師の先生からは、「十分すぎるぐらいに双方の親の言い分を聞いてあげる事、どちらの親も子どもをととても愛しているという事は変わらないのだし、十分親に寄り添っていく事でよい方向性が見いだせるかもしれない」とアドバイスをいただきました。看護の一番大事な点を今回の研修で思い出させてもらいました。

以前、助産師の先輩から、「いろんな患者さんや家族からいろいろな事を学ぶ事で、さらに自分が成長できるんだよ」と教えてもらった事がありますが、最近はその事をより実感するようになりました。小児病棟での出会いや、自閉症やダウン症を持った子どもたちやそのご家族との出会い、妊娠・出産を迎えた女性やその赤ちゃん、ご家族とのいろいろな出会いが私を成長させてくれたのだと思います。看護師・助産師として、常に成長しながら、また、自分の子どもたちからも色々な事を学びながら、充実した自分の人生を全うできたら素晴らしいだろうなと感じています。